

藤村全集

第十四卷

藤村全集

第十四卷

筑摩書房版

藤村全集第十四卷

昭和四十二年十月十日發行

著者 島崎 藤村

發行者 竹之内 靜雄

發行人 東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社 筑摩書房

電話 東京四一七六五一(代表)
振替口座 東京四一一二三番

第十四卷 目次

東方の門

東方の門を出すに就いて……………三

序の章……………七

第一章……………壹

第二章……………壹

第三章……………九

巡禮……………三

一

船出……………三

二

東洋の港々の一……………二五

東洋の港々の二……………三〇

三

海路……………二七

東洋の港々の三……………四〇

四

赤道祭……………四七

八月の印度洋……………五〇

亡命の客……………五二

ダアバン寄港……………五四

阿弗利加の南端……………五六

五

南阿事情……………六〇

南米移民の群……………六五

「海のハンマア」……………六六

「鴉の巢」……………六九

南大西洋……………一六

リオの燈臺を望むまで……………一七

移民の上陸……………一七

六

初めて踏む土……………一八

二三の訪問……………一八

邦人の足跡……………一八

アルゼンチンにて……………一八

大和撫子……………一八

七

奉公する人々……………一九

I博士……………一九

窓のない家……………一九

八

ラ・プラタ河の旅情……………二〇

邦人の歩める道……………二〇

「移民の汗の手記」……………二〇

九

日本的なるもの	二〇八
アルゼンチンよりブラジルへ	二二
ブラジル上陸	二五

十

南米事情の一	二九
南米事情の二	三三
「カボクロ」	三五
南米事情の三	三六
置土産	三九
サンパウロよりリオへ	四〇

十一

リオの三日	三四
北米行の船に上る	四〇

十二

紐育港に近づく	四四
北米雑記の一	四八

北米雜記の二	二五三
--------	-----

十三

北米雜記の三	二五九
北米雜記の四	二六四
北米雜記の五	二六八

十四

A君の以太利行を送る	二七三
北米雜記の六	二七四
北米雜記の七	二七九
北米雜記の八	二八三
黒い麥	二八五
北米雜記の九	二八六

十五

獨逸船	二八八
十一月の北大西洋	二九一
シエルプウル港より巴里へ	二九三
佛蘭西雜記の一	二九五

佛蘭西雜記の二	二六
---------	----

十六

佛蘭西雜記の三	一〇一
佛蘭西雜記の四	一〇三
一つの譬話	一〇六
佛蘭西雜記の五	一〇六
佛蘭西雜記の六	一〇
巴里よりマルセエユへ	一一
「東方の門」	一四

十七

歸路	一六
船窓雜記の一	一〇
船窓雜記の二	一一
船窓雜記の三	一四
魯迅の言葉	一七
故國の島影を望むまで	一六

「巡禮」ノート	三三
---------	----

覺書	三五
----	----

「東方の門」ノート	三五
-----------	----

雜記帳(い)	三七
--------	----

雜記帳(ろ)	四五
--------	----

年譜	五三
----	----

解題	五六
----	----

校異	五九
----	----

東方の門

東方の門を出すに就いて

久しい無沙汰の後で、今回一作を本誌に寄せることになった。わたしはそれを讀者諸君に告げ、また先年前作を本誌上に連載した時と同じやうに今回もこれを年四回に分け、來春正月の新年號より載せはじめて、四月、七月、十月の順に連載の豫定であると、あらかじめそのことを含んで置いて貰へば、それでも足りるので、何もこゝに前置きをするつもりはない。長いことわたしも黙し勝ちに日を送つて來たから、さだめし讀者諸君の中にはめづらしく思つて呉れる方もあらう。作者としてのわたしは、日頃の自分の願ひとしても、成るべくやさしい言葉でこれを綴るであらうと言へるのみで、これが小説と言へるかどうか、それすら分らない。すべては試みである。ともかくも書いて出て見る。實はこの作、戦後にと思つて、その心支度をしながら明日を待つつもりであつたが、かねて本誌編輯者に約したことも果たさず、いさゝか自分でも感ずるところあつて、かく戦時の空氣の中でこの稿を起すことにした。周囲を見れば、親近の青年等まで修業期間を短縮し、銃後にあるものも皆各自の生存のために戦ひつゝあつて、眼に觸れ耳に觸るゝもの人をして深省を發せしめることばかり。戦争が長引けば長引くほど時局はますます重大性を加へて來た。こんなはげしい渦の中に立つて、筆執ることは一層身にしみるばかりでなく、今の自分の老弱に想ひ到れば實に何事も容易でない。でも、あの昔の長道中に向ふ人達が旅立ちのやうに、わたしは荒々しく踏み立てることを慎まねばならぬ。他が一日で行ける路に三日も四日もかゝつても、心しづかにこの長い仕事を踏み出さねばならぬ。これを始めかける頃、思ひがけない方面からの勧誘があつて、この際自分にも南方へと向ふやう一つその奮起を促しに來たと言はるゝ。しかし、わたしはこんな思ひ立つた仕事を控へて漸く着手しようとしてゐたばかりの時であつた。それを見合せよとは無理かも知れないが、三月か四月ほどの間を都合して南洋各地をへめぐり、種々な人にも逢ひ、そこにある學堂や研究所をも訪れて來るやうにと言はるゝ。しかし、わたしはこの年に

なつてそんな使命を果し得る柄ではなかつた。それに先年南米への旅はいろ／＼なことをわたしに教へた。ほとほと身を休める暇もないほどのいそがしい思ひを経験したのもあの旅であつた。今のわたしがもう一度それに耐へられようとは思ひも及ばない。そんなわけで、今度の勧誘は二度も受けよと言はれたが、到頭お断りした。おそらく作者の消息を告げることは、讀者諸君においても樂しとせらるゝところであらうと思ひ、こんな餘事にわたることまで書きつけた。あれやこれやと語つて見たいことはいろ／＼あるが、こゝには盡せない。さういふわたしは、どうにか今日まで健康を保ちつゞけ再び本誌上で諸君に見える日を迎へ得たことをよろこびとするものである。

昭和十七年、秋深き日、靜の草屋にて。

序の章